

理解可能なインプットとしての **Elaborated Version**

山崎 友子

## はじめに

岩手県公立高校入試に 2004 年度入試から英語インタビュー・テストが取り入れられた。文字言語に加えて音声言語による英語コミュニケーション能力の向上への社会と学習者の高い関心を反映した入試改革である。入試は、指導を反映するものでなければならないし、ときには指導のあり方をリードしていく性質ももっている。口頭による英語コミュニケーション能力を高めるには、理解可能なインプットが鍵となる。インタビュー・テストの導入を契機として、教師がこれまでの実践の上にさらに、理解可能なインプットとは何かを模索し、理解可能なインプットを創り上げていこうとする試みが授業の質を変えていくことにつながるであろう。そこで、本稿では文字言語・音声言語における理解可能なインプットとして‘elaborated version’を紹介し、その特徴を論じる。

**1 Simplified Version (簡略化されたテキスト) Authentic Version (真正なテキスト)**

教科書の英語は、語彙・文法項目が難易度によって配列された指導基準にそって選択されているため、実際に使用されている英語より簡略で、時として不自然であることもある。この傾向は書かれたテキストだけでなく、テープなどの音声教材にも見られ、構文が複雑でない、発話速度が緩やかであるなどの特徴がある。これに対して、外国語学習用として意図的に作成されたものでなく、現実に存在する書かれたことば、話されたことばを **authentic version (真正なテキスト)** と呼ぶ。

外国旅行をする時、飛行場でのアナウンスは、特有の表現が特有のイントネーションで流れてくる。外国語学習者が **authentic** な英語に直面する場面の一つである。飛行場でのアナウンスは定型表現が多く、利用する便が予定どおりに出発する場合は問題がないが、出発時間の変更やゲートの変更があった場合は、耳をそばだてて聞かなければ「飛行機に乗れない」という致命的な事態を招く恐れがある。外国語学習者のために作成された、学習者のレベルに配慮したスピードで、外の雑音を遮断した中で録音されたクリアーなリスニング教材に慣れている旅行者にとって、**authentic** な英語のアナウンスを雑音の混ざりの中で聴き取ることは極めて難しい。

一方、飛行場のアナウンスそのもの、英語の映画そのもの、あるいは新聞や小説のオリジナルからの抜粋を教材とし、**authentic** な英語をたくさんインプットしても、

そのままでは学習が成立しにくいことも事実である。新出語句が多いため英語を読むことが嫌いになる生徒は少なくない。わくわくする場面が画面で繰り返されるのにセリフが聴き取れずストレスが高まることもある。わからないインプットはいくらたくさんふれてもわからないままである。つまり、言語習得のインプットとはならない。

現実のコミュニケーション場面で使われる authentic な英語に対応できる教材を開発する必要がある。Krashen (1982) は「理解可能なインプット (comprehensible input)」が言語習得には必要であるという。「理解可能なインプット」とはどのようなものであろうか。英語を外国語として学ぶ学習者が、教室内で学んだことを現実のコミュニケーションの場面でも対応できるようにする「理解可能な」テキストとはどのようなものだろうか。

## 2 書きことばにおける Elaborated Version (精巧なテキスト)

Long (2002) は、現実の場面で使用されるテキストを ‘genuine version (本物のテキスト)’ と呼び、 ‘simplified version (簡略化されたテキスト)’ との違いを次のように説明している。

- (1) **Because** he had to work at night to **provide for** his family, Paco often **fell asleep** in class.
- (2) Paco had to **make money for** his family. Paco worked at night.  
He often **went to sleep** in class.

(1) が genuine version で (2) が simplified version である。‘Because’ に始まる副詞節が使われた genuine version の複文構造は、simplified version では3つの単文に分割された構造へと単純化されている。語彙の面では、‘provide for’ と ‘fell asleep’ が simplified version では、‘make money for’ と ‘went to sleep’ という既習語彙を使用したより簡単な表現へと書き換えられている。この簡略化の問題点として二点を Long は指摘する。

- 1) 新出語彙を既習語彙に置き換えてしまえば、学習者は新しい語彙を学ぶ機会を失う。
- 2) Genuine version が持つ登場人物像に対する情報が、simplified version では異なったものになってしまう。

確かに、‘provide for’が<sup>s</sup>‘make money for’に書き換えられると、与えられたテキストの内容は理解できるが、‘provide for’という語句のインプットの機会はなく、authentic な言語使用場面で‘provide for’が使われた場合に対応できないし、‘provide for’を使ったアウトプットができない。また、家族のために夜働き、学校ではつい授業中にがまんできずにこっくりしてしまうという genuine version で描かれた Paco 少年と同じ少年像を simplified version から得ることは難しい。

学習者の理解を促進するために簡略化されたテキストのこのような弱点を克服するものとして、Long は ‘elaborated version (精巧なテキスト)’を提案し<sup>1)</sup>、上記(1)を次のように書き換えている。

- (3) Paco had to work at night to **earn money** to **provide for** his family, **so** he often **fell asleep** in class **next day during his teacher’s lesson**.

‘provide for’ と ‘fell asleep’ という二つの新出語句はそのまま残しているが、‘earn money’や ‘next day’ を加えることによって、情報量を増やし新出語句の意味についての「推測」をより容易にしている。接続詞については、従属接続詞を等位接続詞に変更した点では、‘because’ という新出語句にふれる機会が失われているが、構造の複雑さに関しては、simplified version の単文構造より複雑な重文構造が提供されている。さらに、‘during his teacher’s lesson’ を新たに加えることによって、人間味が加わり、Paco の人間像をより正確に伝えようとしている。

Long はさらに ‘elaborated version’ ‘simplified version’ ‘genuine version’ の3つを量的に比較し、‘elaborated version’ の特徴を明瞭に示した。

表1 Genuine version・Simplified Version・Elaborated Version の比較

Version	Genuine	Simplified	Elaborated
単語の数	18	19	27
文の数	1	3	1
1文あたりの単語数	18	6.33	27

Simplified version では1文あたりの単語数が極めて少なくなっているのと対照的に、elaborated version では、genuine version よりも単語数も1文あたりの単語数も多い。

新出語彙を残す代わりに、情報量を増やして推測を促進し、文脈情報を追加して内容面の質を保持している。さらに、語彙・構文の簡略化により内容面でも単純化してしまうという *simplified version* の弱点を克服している。‘*Elaborated version*’ は、学習者への良質で理解可能なインプットのために、「追加補足」というストラテジーを用いたテキストである。

### 3 オーラル・コミュニケーションにおける *Simplified Version* と *Authentic Version*

より *authentic* な場面でのコミュニケーションを教室内で実現する方法の一つに ‘*information gap*’ に基づいたコミュニケーション活動がある。学習者が二人一組で活動することが基本形である。たとえば、図書館の館内案内図を二人の学習者が持っている。ただし、そこに記載されている情報は異なっており、A 生の案内図には歴史の本がどこにあるか明記されているが、B 生の案内図にはない。そこで、B 生が歴史の本を探している場合は、A 生に質問するとその場所がわかる。このようにして、自分に必要な情報であるが自分にはなく、相手にはある、という情報差のある場面を作ると、その情報を得るために目標言語を使用しなければならなくなる。この原理に基づいたコミュニケーション活動を例にとつて、*elaborated version* を検討してみよう。

図書館で本を探すコミュニケーション活動を大学生が行っている。そのやり取りを文字化すると次のようになった。

- (4) ①B: I'm looking for a book on Japanese History. Do you know where it is?  
 ②A: Sure. It is No. 16. It's in the second shelf.  
 ③B: I see. Thank you.

このようにして、B は手元の案内図の 16 番と印されているものが目的の本であることがわかり、英語コミュニケーション活動という「タスクの目標」を果たしている。文法的にも “Do you know where it is?” の中の埋め込み文など高度な構文も間違いなくこなしており、満点と言えるだろう。しかし、現実場面の言語使用とは異なっている。たとえば、最初にいきなり質問をすることが現実にあるだろうか。実際は考えにくい。

会話の最小単位は *adjacency pair* (隣接応答ペア) である。(4) のやり取りでは、B の質問に対して A の答えという①-②による *adjacency pair* と、A の答えに対する B の感謝という②-③による *adjacency pair* という整然とした構成が見られる。このような整然とした会話は「交渉的会話」と呼ばれ、用事を片付けるための会話であ

る。これに対し、相手と役割を確認したり、関係を強化したりする潤滑油的な会話を「相互作用会的会話」という。しかし、McCarthy (1991) によれば、どんなに厳格な「交渉会的会話」であっても、人と人との会話である限り、自然な会話データをみると「相互作用会的会話」が採り入れられているとのことである。筆者の体験でも、米国東海岸では、郵便局での切手の購入の場面は客の“Hello.”で始まり、局員の“Have a good day.”で終わるというように、極めて短い「交渉会的会話」の中にすら「相互作用会的会話」が含まれていた<sup>2)</sup>。この知見に従えば、(4) のやり取りは(言語内構造に関する)文法的には完全であるが、談話の文法としては不十分であるということになる。Authentic version にするには、AとBの関係に応じて、“Hello,” “How are you doing?” “Are you busy?”などの相互作用会的発話が必要である。

Authentic な会話では、adjacency pair は複雑に構成されることが多い。たとえば、(5) のデータを見ると、①と adjacency pair を構成する相手は④であり、その間に②と③が挿入されている。②と③は別の adjacency pair であり、④を導くための条件の確認となっている。②-③のやり取りがなければ、①に対する回答の④は発現しないので、挿入された②-③は重要な役割を担っている。

(5) ①X: I'm going to have a party this weekend. Why don't you come?

②Y: Who is coming?

③X: Ken, Meg, Masa and Miki.

④Y: OK, I will come.

(筆者資料)

このように、authentic な会話では情報の流れは一方向的ではない。何が重要な情報であるかの判断は、会話の参加者双方に与えられている。このような観点から会話(4)を見ると、情報を求めるのがBのみとなっている点も不自然に感じられる。求める本のありかを知るのはAだけである。しかし、やり取りが始まれば、質問自体に対する質問や、音声面の不十分さから新たな質問が生じることなどは十分にありうることである。Authentic な会話ならば、(4)と同じ始まりであっても、その adjacency pair の相手は④ではなく、間にBだけでなくAからのさまざまな情報要求も挿入されるだろう。たとえば、(4') のように⑧が①の回答となるような複雑な構成になることが多いであろう。

(4') ①B: I'm looking for a book on Japanese History. Do you know where it is?

②A: Oh, hi. How are you doing?

- ③B: OK. How about you?  
 ④A: Fine. What are you doing here?  
 ⑤B: Well, I'm working with the assignment of History Class. So I need a book on Japanese History.  
 ⑥A: U-hm, Japanese History. I got it. Professor Y...  
 ⑦B: Yes, she's demanding. Did you take her course?  
 ⑧A: Yeah, it was a tough course. OK, it is No. 16, in the second shelf.  
 ⑨B: I see, No. 16, the second shelf.  
 ⑩A: That's right. Good luck!  
 ⑪B: Thank you. See you.

しかし、authentic なテキストが教材として最もよいのかどうか検討の余地がある。Belton(1988)は、概念・機能派の語学教材は交渉的会話を強調しすぎて、相互作用的会話の働きを軽視していると批判し、両者のバランスをとるよう指摘している。この指摘は authentic なテキストそのものを教材とすることを薦めているのではなく、学習者に相互作用的会話の特徴を適切に提示した教材を作成することを求めているのである。

#### 4 オーラル・コミュニケーションにおける Elaborated Version

Reading のためのテキストに elaborated version があつた。では、オーラル・コミュニケーションにおける elaborated version はどのようなものだろうか。英語を第一言語とする二人の経験豊かで優れた英語教師 V と W による information gap activity にそのヒントが見られた。次の会話 (6) は、3 で使用したコミュニケーション活動を教師 V と W が行ったものを文字化した一部である。

- (6) ①V: Here we are in a library.  
 ②W: Beautiful place, isn't it?  
 ③V: Yeah! And uh, I'd like to tell you where some of my favorite books are.  
 ④W: Great. And I will tell you what my, where my favorite books are.  
 ⑤V: OK, well, ummm, the first book that I really enjoy, it's not necessarily a book, the book is a dictionary.  
 ⑥W: Umm.  
 ⑦V: It's a short dictionary of music. Number 16.  
 ⑧W: Number 16.

⑨V: And it is ...on, on the, on the left section, ...

⑩W: Uh-huh.

⑪V: On the top.

⑫W: On the top.

⑬V: On the left section.

⑭W: On the very top.

⑮V: On the very top. It's the top book.

⑯W: OK. So that's the short history music.

⑰V: Short dictionary of music.

この会話は authentic ではない。Authentic な会話では、わざわざ “Here we are in a library.” と言う必要はない。また、V も W も聞かれもしないのに、自分の好きな本がどこにあるか教えてあげると言う。このことから、会話 (6) は外国語学習の「タスク」として行われており、authentic な会話ではないことがわかる。しかし、タスクを達成することを目的とした単純化された会話 (4) と異なり、⑤に対する回答となる発話が⑩であり、その間にさまざまなやり取りが挿入された複雑な構造をしている。

挿入部分を見てみると、いくつかの特徴がある。一つは、⑥⑩に見られる「あいづち」<sup>3)</sup>の使用である。二つ目は、③の “Yeah” や④の “Great” などの「フィードバック」の使用である。三つ目は、⑧の「オウム返し」で、確認の動きが頻繁に見られる。四つ目は、⑪～⑮に見られる「言い換え」がある。⑪では “On the top.” であったものを⑮では “On the very top.” とさらに詳しく言い換え、さらに加えて “It's the top book.” と完全な文で表現している。最後に、一連の会話の談話としての終結を示す「discourse marker (談話の標識) の使用」がある。⑯で使用されている ‘So’ は V の好きな本の場所についての一連のやりとりがほぼ終結したことを示している。

この会話をスピーキング教材として見た場合、どのような効果があるだろうか。列挙してみる。

- 1) 「相互作用的会話」のモデルとなる。「あいづち」「フィードバック」は相互作用的会話に特に頻繁に使用され、会話の参加者の関係性を作り上げる重要な言語上の道具である。このような道具が効果的であることを知り、使用する機会となる。
- 2) 「オウム返し」という確認のためのストラテジーを学ぶことができる。
- 3) 「言い換え」によって、表現の幅を広げ、再確認のストラテジーを学ぶこと

ができる。

- 4) 「談話の標識の使用」を知り、使用してみることで、会話を adjacency pair という最小ユニットから discourse (談話) というより大きなユニットに拡大することができる。

リスニング教材としてみた場合、聞き手である学習者にもたらす効果は以下のよう考えられる。

- 5) 聞き手は、「フィードバック」の使用により、情報の確実性を確かめることができる。
- 6) 聞き手は、「オウム返し」により、聴き取りの量が増え、かつ情報の重要性を知ることができる。
- 7) 「言い換え」は、聞き手が自分の理解が正しかったのかどうかを確認することを可能にする。また、聞き手の英語力の幅に応じた対応が可能となる。
- 8) 「discourse marker (談話の標識) の使用」は、聞き手が話し方の要点を把握することを容易にする。

このように、やり取り (6) はわずか 30 秒ほどの短いものであるが、その中には学習者が話し手の場合も聞き手の場合にも効果的に作用するさまざまな工夫が挿入されている。これらは経験豊富な英語を第一言語とする英語教師により意識的に加えられた部分であり、オーラル・コミュニケーションにおける ‘elaborated version’ と呼ぶことができる。その特徴として、さらに二点付け加えておく。

- (7) ①V: You go to the right, the same shelf.  
 ②W: Ha ha, OK  
 ③V: It's the fifth book from the right.  
 ④W: Wow! Alright. One, two, three, four, five. That's also Number 9?  
 ⑤V: Yup.

①の主語に注目したい。この部分を V 先生は、“You go to ...” と You を主語にして言っている。日本人大学生は、“There is a book on the same shelf.” と言った。“You go to ...” は、より場面に即して動きを感じさせる pragmatic な表現である。さらに、④に見られるように、5 番目の本にたどり着くのに、“One, two, three, four, five.” と数えている。これも動きを感じさせる表現方法であると同時に、5 番目という情報

を言い換えて再度情報提供をしていることにもなり、聞き手が得る情報は豊かになり、理解がより容易になる。

### おわりに

できるだけ authentic な表現を学び、現実の場面に対応できるようになりたいという願望を学習者は持っている。その願望に応える方法として、authentic なテキストの持つ特徴を保持したまま、学習者の理解を促進する情報を「追加補足」した 'elaborated version' は大きな可能性を秘めている。Reading/Writing のためのテキストだけでなく、オーラル・コミュニケーションのためのテキストにも 'elaborated version' は存在する。'Elaborated version' の手法である「追加補足」があれば、話すスピードはゆっくりでなくとも、聴き取り、理解することが容易になる。また、そのような精巧なインプットにふれていれば、話すために必要な語彙・構文、およびストラテジーをも学ぶことができる。そして、オーラル・コミュニケーションの重要な特性である相互作用性と談話というユニットを学ぶことができるのである。

はじめに述べたように、入試は指導のあり方をリードするものでもある。インタビュー・テストの導入を機に、これからの英語教育の中では、良質で理解可能なインプットを学習者に提供するさまざまな工夫がなされることと思う。本稿で紹介した 'elaborated version' もその工夫の一つであり、教師が authentic なテキストの特徴を理解した上で、「追加補足」というテクニックを用いる力量を高めていくこと期待される。

### 注

- 1) Long (2002) は 'modified elaborated version' も提案しているが、ここでは紹介を省略した。
- 2) 同様の例を Aston (1988) はイタリアの書店での客と店員のやり取りの中に発見している。
- 3) 水谷 (1985) は、あいづちは日本人の習性であるが、外国人には理解しがたい、と述べている。しかし、そのような言語社会的な見方の他に、あいづちによって中断された文を一つとみると「補強」と考えることもできるという文法的立場からの解釈も行っている。

### 引用文献

Aston, G. 1988. *Negotiating Service: Studies in the Discourse of Bookshop Encounters*.  
Bologna: Editrice CLUEB.

- Belton, A. 1988. Lexical naturalness in native and non-native discourse. *English Language Research Journal*. (ns), 2, 79-105.
- Krashen, S. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Long, Michael. 2002. JACET 談話分析研究会における特別講演.
- McCarthy, Michael. 1991. *Discourse Analysis for Language Teachers*. CUP.
- 水谷信子. 1985. 『日英比較 話しことばの文法』東京：くろしお出版.
- 斎藤栄二他. 1986. 『インプット理論とその実践 新しい英語科授業の創造』東京：桐原書店.

(岩手大学教育学部英語教育講座)